「野生の物語、人間の物語ーー先住民神話と文学」シンポジウム開催

札幌大学大学院文化学研究科附属ペリフェリア・文化学研究所

ペリフェリア・文化学研究所は２００６年１月２５日（水）シンポジウム「野生の物語、人間の物語ーー先住民神話と文学」を開催します。このシンポジウムは作家Ｊ．Ｍ．Ｇ．ル・クレジオ氏の４０年ぶりの来日を記念して、東京外国語大学大学院（１月２９日）と札幌大学大学院（１月２５日）で開催します。

作家Ｊ．Ｍ．Ｇ．ル・クレジオ氏と津島佑子氏をシンポジストに、東京外国語大学大学院教授今福龍太氏をコーディネーターに迎えて開催します。神話から物語がどのように創作されていくのか、先住民の神話がどのように語り継がれてきたのかを、アイヌ、モーリシャス島やメキシコ等の事例を話題にしながら、神話世界を通じた現代文学における「物語」の再創造の可能性について考えていきます。

開催日時：　２００６年1月２５日（水）　受付　１７：３０～
　　１８：００～１９：３０　シンポジウム
　　１９：３０～２１：００　懇親会
場　　所：　札幌大学　リンデンホール　（札幌市豊平区西岡３条７丁目３番１号）
シンポジウム受講料は無料、懇親会費500円
問合せ先：札幌大学文化学部　瀧元誠樹　011(852)9099　直通、seiki-t@sapporo-u.ac.jp

【Ｊ．Ｍ．Ｇ．ル・クレジオ氏】

１９４０年フランス、ニースに生まれる。作家としてのデビューはルノド賞を受賞した長編小説『調書』。さらに『発熱』『洪水』『物質的恍惚』とつづけて２０代で作品を出版し、ヌーヴォー・ロマン全盛の６０年代フランス文学における異端的作家として注目される。

【津島佑子氏】

１９４７年東京生まれ。『葎の母』（1975）で田村俊子賞。『寵児』（1978）で女流文学賞。『黙市』（1984）で川端康成賞。『夜の光に追われて』（1986）で読売文学賞。『火の山－山猿記』（1998）で谷崎潤一郎賞、野間文芸賞。最新小説である、ナラを舞台に展開する時空を超えた壮大な母子の叙事詩『ナラ・レポート』で2005 年度紫式部文学賞。

【ペリフェリア・文化学研究所】

札幌大学大学院文化学研究科附属ペリフェリア・文化学研究所、２００４年設立。従来のセンター＝中心としての研究所の概念を覆し、周縁＝ペリフェリーの視点から、文化の構造と役割を解明することをめざして設立されました。北海道という地域の特性を活かし、世界中の周縁領域で活躍する研究者とも連繋しながら、中心をもたないネットワークとしての知を活性化する場が「ペリフェリア・文化学研究所」です。研究所の活動を通じて得られた成果は、シンポジウム、公開講座、刊行物などのかたちで、地域へ向けて発信してゆきます。

札幌大学〈ペリフェリア〉　シンポジウム

「野生の物語、人間の物語　――先住民神話と文学」

２００５年１月２５日（水）18時～20時
札幌大学リンデンホール１Ｆ

講演者：　J.M.G.ル・クレジオ（作家）
津島佑子（作家）
コーディネーター：　今福龍太（文化人類学者・東京外国語大学大学院教授）

作家ル・クレジオは、初期の傑作『悪魔祓い』（ 1971）以後、一貫して、アメリカ先住民の宇宙観への深い理解に立って、ヨーロッパによる野生と部族文化の破壊によって成し遂げられた現代文明への批判を続けてきた。最新刊のエッセイ集『歌の祭り』（岩波書店、2005）において、こうした思想は余すところなく述べられている。同時に彼は、マヤ神話『チラム・バラムの書』やチチメカ神話『ミチョアカン報告書』など、メキシコ先住民世界における宇宙開闢の神話テクストをフランス語で校閲・翻訳する仕事によって、神話を現代文学の生成の場に架橋するという刺激的な試みを行ってきた。

口承の伝統に立った先住民神話と書かれた文学との関係は、それらが共有する「物語」そのものの力、という主題から考察することができる。アイヌ叙事詩ユーカラの世界に深く関わりながら日本語文学の創作を続ける作家津島佑子とル・クレジオとの対論を通じて、神話世界を通じた現代文学における「物語」の再創造の可能性について考えたい。

講演者略歴

J.M.G.ル・クレジオ

1940 年、フランス、ニースに生まれる。父方は、フランス・ブルターニュ地方からインド洋のモーリシャス島（仏領のち英領）に移住した家系で、この家族の系譜は小説『黄金探索者』にも描かれている。作家としてのデビューは1963 年のルノド賞を受賞した長編小説『調書』。さらに『発熱』『洪水』『物質的恍惚』とたてつづけに二十代で作品を出版し、ヌーヴォー・ロマン全盛の６０年代フランス文学における異端的作家として注目される。祖先のゆかりの地モーリシャス島、妻の生地であるモロッコ、そして自己再発見の地メキシコの三地点を現在も結びながら、それら異邦の土地を舞台にした『砂漠』『オニチャ』など数多くの小説を書きつづけている。最新の翻訳に自伝的小説『はじまりの時』（原書房、2005）がある。

津島佑子

1947 年東京生まれ。『葎の母』（1975） で田村俊子賞。『寵児』（1978）で女流文学賞。『黙市』（1984）で川端康成賞。『夜の光に追われて』（1986）で読売文学賞。『火の山ー山猿記』（1998）で谷崎潤一郎賞、野間文芸賞。最新小説である、ナラを舞台に展開する時空を超えた壮大な母子の叙事詩『ナラ・レポート』で2005 年度紫式部文学賞。フランスで刊行されたフランス語訳『カムイ・ユーカラ』を監修。大庭みな子監修『テーマで読み解く日本の文学』（小学館、2004）で口承文芸、アイヌ叙事詩などについて執筆している。

問い合わせ:札幌大学文化学部 瀧元誠樹
011(852)9099　　seiki-t@sapporo-u.ac.jp